

ハイブリッド文明の構築に向けて

著者名(日)	染谷 臣道
雑誌名	異文化コミュニケーション研究
巻	10
ページ	15-35
発行年	1998-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000201/

ハイブリッド文明の構築に向けて

染谷 臣道

Toward the Construction of Hybrid Civilizations

Yoshimichi SOMEYA

This paper is an attempt to offer an idea to construct a hybrid civilization for Japanese and Indonesian people to coexist in Indonesia. Today in Indonesia there are some thousands of Japanese families who live with their Indonesian servants and many of them suffer from hardships owing to their lack of understanding Indonesian culture. I will take a case of a Japanese wife who employed a maid but failed to manage her. The Japanese housewife could have managed successfully if she had learned Indonesian culture, especially Javanese one, since her maid was a Javanese. The Javanese people, who still speak as daily language not national language i.e. Indonesian but their own native language i.e. Javanese, rarely use the word of gratitude to their servants. So without doubt the maid misunderstood her mistress' Indonesian words of gratitude. The intercultural communication between them thus broke down. The civilization itself is a hybrid high culture which is composed of several cultures. Now the hybrid civilization must be constructed among the civilizations of the world. The practices of Japanese families in Indonesia is certainly one of the examples.

キーワード: ハイブリッド文明、イーミックな異文化理解法、ジャワ語の感謝表現、日本語の感謝表現

文明と感謝表現

感謝の気持ちを表現する言葉をもたない文化が存在する可能性は、後に述べるように、ないとはいえない。しかし文明ということになるとその可能性はないだろう。私はここで文化と文明を区別して用いている。文化と

は猿人が人類に進化したときに獲得し、今日に続く生活様式全体を意味するが、文明はそうした人類が都市生活を始めたときに獲得した新しい文化を意味する。それは単に技術的側面ばかりでなく、精神的側面においても一層複雑かつ洗練された文化である。都市は、異民族、異なった職業の者たち、異なった階級の者たちがともに住む異質性そして規模の大きさを特徴とする社会である。それは都市以前の同質性と小規模性を特徴とする社会とは大きく異なるものであった。都市文明は異質な人々が共生できるようにするための物理的制度的装置でなければならなかった。感謝表現を含む挨拶語もそうした装置一言語装置一のひとつだった。以下では、文化という概念を人類の生活様式全体を指し、そうした文化の中でもとくに上記のような特質を強調したいときには文明という概念を用いることにする。そして文明を強調する必要がなく、文明を含む文化全体を考えているときには文化という概念を用いることにする。

文明は技術的側面の「大規模で高度な組織化、制度化、統合化、精緻化」(伊東: 7)ばかりでなく、精神的側面の高度な組織化、制度化、統合化、精緻化も達成されなければ、「心と物との調和した真の人間性の回復」(伊東: 24)は望み得ず、バランスを欠いて種々の困難に遭遇するだろう(染谷: 366)。

社会が複雑になればなるほど、そして規模が大きくなればなるほど、文明はそれに合わせて変容しなければならない。そして複数の文明が接触し、共生しなければならなくなったときには、それらの文明を混交し、超越した新たなハイブリッド文明の構築が必要となる。そうした新たに構築されたハイブリッド文明は、それまでの地域に根ざした文明を超えるものであるがゆえに、より独立的となるだろう。

同質性と小規模性を特徴とする文明以前の社会も人間関係にはそれなりの困難がつきまとい、それなりの装置を工夫した。たとえば狩猟採集民がしばしば行うように、コンフリクトが生じたとき、集団を分けるという方法もあった。緊張緩和のため、すぐ後で紹介するように、たとえばタバコをともに吸うような行為もあっただろう。コンフリクトを回避するためにさまざまな言語的装置も作り出しただろうが、挨拶語がどこまで発達して

いたかは疑問である。私がフィリピンの山地民族(マンヤン族)の社会で見たのは、山道で出会った人々が挨拶語を交わすのではなく、両者座り込んでタバコを吸い始め、なにやらぼそぼそと話し始めるといった実質的な会話であった。また、彼ら固有の「ありがとう」はなく、「サラマツト(salamat)」というフィリピン語(国語)を使っていた。もっとも、このサラマツトもアラビア語からの借用であるからフィリピン語にも固有の「ありがとう」はなかったのだろう¹⁾。文明からの借用に他ならない。

意味内容をほとんどもたないファティックな挨拶語は文明以前にもなかったとはいえないが、多様な人々が混在する文明社会において更に発達したに違いない²⁾。文明はそれぞれの地域の土着的文化を基礎にし、他の文明を受容しながら、ますます高度化する技術力で独特の様式を築いてきた。どの面に技術力を駆使するかは文明によって異なり、そこに個性が発生するわけである。敬語をひとつの個性とする日本文明は独特の挨拶語も発達させてきた。それは方言にも共通語にもうかがうことができる。本稿で考察の対象とする「ありがとう」にしても、「ありがとうございます」、「ありがとうございますーす」、「ありあとやした」、「ありがとっ」などさまざまなヴァリエントをもち、人間関係の複雑さに対応してそれを調整する装置としての機能を果たしている。

日本国内でさえ多様なヴァリエントがある挨拶語に対応を迫られている一方で、いつの間にか、私たちは国境を越え、さまざまな言語の挨拶語と付き合わなければならないという時代を迎えてしまった。インドネシアとりわけその首都であるジャカルタに住む日本人は、インドネシア文明とりわけこの国の主要民族であるジャワ人の文明に対応する必要に迫られている。彼らは二つの文明(日本文明とインドネシア文明)あるいは三つの文明(日本文明とインドネシア文明とジャワ文明)が交錯する中で生活し、その間のズレに悩み、調整に苦闘し、新たな文明の創造を強いられている。新たな文明の創造などという大げさに思われるかもしれないが、たとえ個人レベルであろうと、異質性を乗り越え、共生を可能にする生活様式の創造は文明の創造に他ならない。異質な人々同士の出会いはますます頻繁になり、ますます大量になり、とくにこの半世紀、国家を超え、まさに地球

的規模にまで拡大した。世界のあちこちで出会う人々自身がすでにそれぞれ固有の文明をもっている。したがって今や地球のあちこちに既成の文明の間を調整するいわばハイブリッド文明の構築が要請されているのである。

日本はさまざまな文明を受容し独自の文明を創造するという経験は豊富である。しかし異文明のなかで当該文明との間に新たな文明を創造するといった経験はあまりなかったのではないだろうか。さらにそうした経験が蓄積され、新たな文明の創造に活かされたということはほとんどなかったのではないだろうか。世界のあらゆる文明と共生を図れるような文明間文明を創造することがとりわけ強く求められている日本にとってこうした経験の蓄積と新たな文明の創造はきわめて重要であろう。

本稿では、インドネシアに住む日本人の苦い経験を具体例とし、そうした困難の原因を明らかにしつつ、その困難を超えるためにどのようなハイブリッド文明を構築したらよいかに関する提言を試みたい。

郷に入っては郷に従え

異文化のなかで多少とも長く滞在するときの鉄則は、「郷に入りては郷に従え」だとしばしばいわれている。そしてその英語版は *Do in Rome as the Romans do* とか、*When in Rome, do as the Romans do* だという。確かに、異文化のなかで生活するにはその文化に適応するのが最も障害を引き起こさない方法であると教えている点で、これら東西のことわざは同じ意味だといってよいだろう。しかし、一方が「郷」といい、他方が「ローマ」といっている点で全く逆のこともいっているように思われる。なぜなら、「郷」というのは、村、里、田舎など「文化的に遅れたところ」というニュアンスがあり、他方、ローマは、反対に、「文化的に進んだ」、あるいは「優れたところ」というニュアンスがあるからである。

いわば「おのぼりさん」が都会の人々のやり方に合わせようとするのは当然なのかもしれない。なぜならそこには、彼が憧れる未知の新しい文明があるからである。逆に都会からやってきた者が「郷」の文化になじもうなどとはあまり思わないだろう。彼の身に付いた都会人的行動様式は羨望

の対象とはなれ、侮蔑の対象とはならない。かえって都会人たる彼自身が「郷」の文化を蔑むかもしれない。そして奇妙なことに、その蔑みがしばしば「郷」の人自身に受け入れられるのである。

都会人が「郷」の文化を蔑み、それが「郷」の人に受け入れられるという一般的傾向にもかかわらず、「郷に入っては郷に従え」というのは、単に異文化に適応すべしというメッセージだけではなく、どんな文化に対しても敬意をもって接せよというメッセージも含んでいる。だとすれば、遅れた文化を軽蔑することなく適応せよと勧める「郷に行っては…」の方が、“Do in Rome…”よりはるかに高い知恵を含んでいるといっていよう。憧れの対象となっている文化を身に付けようとするのはいわば自然の成り行きであり、“Do in Rome…”がいわずもがなのことわざであるのに対して、「郷に入っては…」は人間の一般的傾向を戒める教訓を含んでおり、難しい課題を課しているからである。

インドネシアに住む多くの日本人は、まさに「郷に入っては…」が突きつける課題に直面しているといっていよう。こんな話を聞いたことがある。海外駐在が決まったある商社員が妻にそのことを告げたところ、彼女は大喜びだった。憧れの海外生活ができるからだ。ところが、駐在先がロンドンでもニューヨークでもなく、ジャカルタと聞いて彼女は愕然として「ジャカルタなら私は行かないわ」といったというのである。いうまでもなく、彼女にとってロンドンやニューヨークは現代のローマである。それに対してジャカルタは「郷」であった。

彼女は今日の日本では決して例外ではない。多くの人々を代表しているといっていよう。そのように「郷」を蔑視する人々が「郷」の文化に見向きもしないとしても不思議ではない。彼らの関心は「ローマ」であって「郷」ではないからである。したがってインドネシアに住む在留邦人がインドネシアの文化を理解しようとせず、自らの流儀で生活しようとしているのも当然だろう。だが、そこに大きな困難が待ち受けているのである。

人も物財も情報ももっぱら欧米との間で流れていた時代は一挙に変わり、今や全世界との間を流れている。とりわけアジア諸国との交流はます

ます増加している。このような時代にあっては「ローマ」にだけ顔を向けていることはできないはずである。単に経済的な意味だけでなく、政治・外交から言語や芸術といった文化レベルに至るまで世界の「郷」と上手に付き合わなければならない。

異文化理解の方法について

本稿は、「郷に行っては…」の精神にしたがうことの大事さを先ず強調し、そのうえで、どうしたら「郷」の文化をうまく理解できるかについて、イーミック (emic) な理解法の有効性を示す³⁾。イーミックな理解法とは、いわば対象となる文化をその内側から理解しようとする方法であり、エティック (etic) な理解法と対照される。イーミックな理解法では、対象とする文化がもつ概念や論理に沿って理解することが求められることから、当該文化の保持者が最もよく理解できるかのように思われがちだが、実際には自己の文化を対象化することほど難しいことはなく、したがって理解しにくいというパラドックスがある。ネイティブ・スピーカーが自らの言語について語れるようになるのは、他の言語を知ってからであるように、自らの文化を理解し、語れるようになるのは他の文化を知ってからである。したがってある文化は他の文化の所有者によって最もよく理解されるといってよい。しかし他の文化からアプローチする際に、しばしば起こるのは理解ではなく誤解であるという事実がある。自文化を尺度にした判断に陥るからである。ただ、誤解を犯した彼が次第に当該文化の内面にまで立ち至り、上述のイーミックな理解によって誤解を修正し、より深い理解に達することは可能である。

客観的で普遍的な基準から異文化をいわば外側から理解しようとする方法がエティックな理解法である。これは文化を比較するうえで好都合であるが、この理解法をもって人文・社会科学を構築してきた人々の多くが西洋人であったことから、これまで想定されてきた客観的で普遍的とされてきた基準自体が西欧近代の文化に拘束された基準に過ぎないのではないかという問題が指摘されている。たとえば家族や婚姻について現在の人類学は定義できないと結論づけている。世界にはさまざまな「家族」があり、

「婚姻」がある。西欧近代の文化に拘束されたいわゆる家族や婚姻はそれらの中の一例に過ぎないのである(リーチ: 238)。

それならば、果たして客観的で普遍的な基準は存在するのだろうか。疑問視する論者もいるが、存在するという前提に立った場合、それはどのようにして構築されるのかといった課題を含めた検討が必要となっている。西欧文化以外からアプローチした理解の結果が数多く提出され、全ての見方を比較検討し、相対化し、そのなかから共通項を抽出する作業を通して客観的で普遍的な基準を導き出せる可能性を求める必要がある⁴⁾。西欧がますます相対化されつつある今日、その可能性は開かれている。その意味で非西欧世界のひとつである日本の果たすべき役割は大きい、そのためには、日本人が、自らがどれほど強く西欧的パラダイムに浸されているかに一刻も早く気づき、それから脱却し、自らのパラダイムからアプローチするスタンスを確立することが緊要であろう。

トゥリマ・カシーを連発した日本人

インドネシア語にトゥリマ・カシーという言葉がある。誰かから物をもらうとか、好意ある行為を受けたときなどに発する言葉であるから日本語の「ありがとう」にあたると考えても間違いではない。したがって「ありがとう」というつもりでトゥリマ・カシーといったとしても当然といえば当然で、ある日本人の主婦(仮に山中さんとしておこう)がインドネシア人の女中(仮にヤティさんとしておこう)⁵⁾に向かってトゥリマ・カシーといっても問題はないはずである。ところが、それを連発しているうちに、仕事を頼むとあからさまに不機嫌な態度をとり、しぶしぶとおこなった仕事は手抜きだらけという始末になってしまったという。そのうえ巧妙に釣り銭をごまかすようになり、手が付けられなくなってしまった。山中さんは、自分が女中に対して思いやりをもって接しているにもかかわらず、なぜ彼女がそんな態度をとるようになってしまったのか皆目見当がつかず、悩むばかりだった。四六時中同じ屋根の下にいるのだから、だんだんと気も滅入ってくる。それに耐えられず辞めさせたいと思うものの、はっきりした理由がなければそれもできないと思うと悩みは深まるばかりだった。

半年間我慢したが、ついに彼女を辞めさせた。こうした問題はインドネシアではしばしば耳にする。中には使用人の扱いをめぐって雇用者である夫婦の間で喧嘩が始まったり、女主人が病気になったりする。また、軋轢が高じて盗難事件や傷害事件に発展するケースもあるなど当事者にとってはきわめて深刻である。外交官の中にはこうした問題が外交問題に発展することを懸念している人もいるほどである。

これは、二つの異なった文化が交錯し、軋轢を生じた一つの例である。まず日本人主婦の方から説明してみよう。私は、日本では過剰なほどに「ありがとう」が使われているのではないかと思う。商店では客に対して一日に何十回何百回と「ありがとうございました」を繰り返す。最近では、コンビニなどでよく「ありがとうございます」と独特の抑揚をつけて使っているのを耳にする。連発しているうちに定型化したのだろうか。商業用語としての「ありがとうございます」ばかりではない。日本の学校では「オアシス運動」などといって挨拶の言葉をかける習慣を身につけさせる教育がなされている。「おはようございます」、「ありがとうございます」、「失礼します」、「すみません」がすぐに口から出るように習慣づけ、人間関係を円滑に進められるようにということなのであろう。私の娘が通う小学校では毎朝元気よく挨拶ができたクラスを校内放送で発表して誉め称えるということをやっている。私が現在勤務する大学に移ったとき、私はちょっとしたカルチャー・ショックを受けた。バスから降りるとき、多くの学生たちが運転手に向かって「ありがとうございました」と声をかけるのである。私には過剰に思えてならない。ことによったら私はインドネシア文化にかなり影響を受けてしまったのかもしれない。インドネシアではそれほど頻繁には「トゥリマ・カシー」を使わない。

「ありがとう」を連発する日本人が、インドネシア人は感謝の言葉をあまり使わないから感謝の気持ちが弱いのではないかと疑うのも無理はない。インドネシアが大好きでインドネシア語を勉強し、念願かなってインドネシアを訪れた人がいた。彼が帰って来て私にいうには「インドネシアの人は感謝の気持ちがないので、みやげ物をあげても張り合いがなくなりますね。次の日に会っても『トゥリマ・カシー』の一言もいわず、何も無

かったみたいな顔をしているんですよ」といった。そして続けて、「日本だったら次の日に会えば『昨日はどうもありがとうございました』(考えてみれば感謝の言葉に過去形があるのも興味深いことであるが)ぐらいのことを云わないと気持ちが落ちつきませんよ」。インドネシアではトゥリマ・カシーに過去形がない(これは他の言語でも同じだろう)ことが暗示するように過去にさかのぼって感謝の意を表することはない。もしそうしたら要求がましいと思われるだろうとあるインドネシア人が解説してくれた。インドネシア文化は過去にさかのぼって感謝の意を表する文化ではない。といって感謝の念がないとはいえない。かの日本人は言語表現がなければ気持ちもないに違いないという日本文化を基準にした判断を下したのである。暗黙のうちに彼は日本文化を客観的で普遍的な基準としていたわけである。

先の山中さんは日本にいるとき家事を手伝ってくれる子供たちに「ありがとう」を連発する母親だったにちがいない。彼女は、女中の仕事に対してなにか言葉を掛けないと気が済まなかったと述べていた。こまやかに気遣う人だったのである。

こうした細やかな気遣いから折に触れて声を掛けることは一応「美風」であるといってよいだろう。私のように過剰とを感じる人も少なくないかもしれないが、そうだとしても、日本国内に限っていうならば、大きな誤解を生むことはないだろう。しかしそういう人が外国で生活するようになってその国の挨拶語に置き換えて、日本にいるのと同じ感覚でそれを使ったとしたらどういうことになるだろうか。その国の挨拶語をその使われ方を含めたコンテクストに従わなければ、なんらかの誤解が生じることは避けられない。

ジャワ語の感謝表現

独立以来 50 年しか経っていないインドネシアは形の上では国民国家の体裁をとっているが、二百とも三百とも云われている数多くの民族を擁し、それぞれの民族がそれぞれの文化に従って生きている状態では単一のインドネシア文明を構築することはかなり難しい。それぞれの文化を融合

させ、目下インドネシア文明を創造中というのが現状である。このような状態においては、どの民族に属するインドネシア人なのかが判らないと彼(彼女)を理解することができない。日本でも関東出身か関西出身かで考え方がちがうが、インドネシアはその差がもっと大きいと考えてよいだろう。

ジャカルタで働く女中はジャワの農村出身者が多い。ここでジャワというのは主にジャワ島の中・東部のことであり、そこにはインドネシアの最大多数の民族であるジャワ人が住んでいる。彼らは日常生活ではインドネシア語よりもむしろジャワ語を多く使う。インドネシア語は、今日のインドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイなどを覆う地域でリングア・フランカとして通用していたマレー語を母体に、インドネシアが独立したときに制定した国語である。この言語は敬語や時制や単複表現あるいはジェンダーなどがないためになじみ易いという利点がある。文体も状況に応じて変化させることができるなど柔軟性があり、それだけ可能性に満ちた言語といえるが、明確な文明を背景にしていないという弱点を抱えている。

それに比べるとジャワ語は明確な文明的背景をもっている。紙幅の関係でくわしくは述べられないが、一言でいえば、アールースとカサルを軸にして構成された階層文明である。アールースというのは「上品な」、「優雅な」、「洗練された」、「なめらかな」、「玄妙な」といった意味と同時に「目に見えない」という意味も合わせ持つ形容詞で、カサルとは「下品な」、「粗野な」、「あらわな」といった意味と同時に「目に見える」という意味も持つ。私はこの対語がジャワ文明のキー・ワードだと考えている。

ジャワ文明のありとあらゆる面がこの形容詞で整序される。もちろん、民主主義を標榜する国家のなかに存在する今日ではその国家的拘束から逃れることはできないが、それでも旧貴族層に属する人々はアールースとされ、庶民層はカサルとされるような旧習は依然として根強く残っている。民主化の影響で多くの若者は使いたがらなくなっているが、アールースなジャワ語は今も健在である。ジャワ語は最も尊敬の度合いが高い最敬形語(クロモ・インギル (krama inggil)、日本語の尊敬語に当たる)を頂点に

敬形語(クロモ (krama)、日本語の丁寧語に当たる)、準敬形語(クロモ・マディヨ (krama madya)、敬形語のもつ丁寧さをすこし弱めたもので一般庶民がよく使う)そして常形語(ゴコ (ngoko)、尊敬の念も丁寧さも欠いた言葉)の諸段階からなる。もちろん語彙の全てが以上の4段階からなるわけではないが、日常よく使われる言葉はそうのようにしばしば4段階ないし3段階からなる。これら諸段階からなる単語を選択し、文体を構成するが、その文体は大きく3段階に分かれ、その中がまた細分されて、合計で9段階ないし10段階に分類される。それらはある規則に従って対者との上下・親疎関係を調節する言語的装置となっている。それを間違えると対者との人間関係を損なうことになる。

感謝の意を表する挨拶語にもいくつかの段階を認めることができる。何人ものジャワ人が述べるところをまとめてみれば次のようである。最も高い敬意を内包した文体はマトウル・スンバー・ヌウン (matur sembah nuwun) である。マトウルとは「申し上げる」という意味の謙譲形語である。スンバーとは尊敬すべき相手に対する「敬礼」が原義だが、ここでは敬意を強調するために挿入したものであろう。ヌウンというのは「乞う」、「お願いする」といった意味の謙譲形語である。つまりマトウル・スンバー・ヌウンとは、二つの謙譲形語とそれを強調する言葉からなり、直訳すれば、「お願いすると平に申し上げる」となる。それでは、なぜこれが感謝表現になるのだろうか。ジャワ語の辞書などには説明がないので推測するしかないが、これは、謙譲形語を二つ重ねていることから自らを小さくし、低め、つまり持たざる者と規定し(従って相手を大きくし、高めて持てる者と規定し)、その好意なり恩恵なりをひたすら渴望する姿勢を言語的に表現することで感謝の意を表していると考えられる。かなり間接的な表現だが、間接性はまさにアールス価値が要求するものの一つである。

マトウル・スンバー・ヌウンに次いで感謝の意を表す文体はマトウル・ヌウンである。これは日常生活でしばしば使われるが、ヌウンとだけいう言い方もある。これはマトウル・ヌウンを略したもので、くだけた感じがつきまとうから、幾分敬意を欠いた表現といえるが、それでも次のヌド・ヌリモ (nedha nrima) より敬意はある。

ヌド・ヌリモのヌドは「望みます」と訳すことができ、丁寧さがある。意味の上ではヌウンと同じだが、謙譲の念はない。ヌリモとは「甘んじて受け取る」という意味の常形語である⁶⁾。したがってヌド・ヌリモ(直訳すれば「甘んじて受け取りたいです」となり、マトウル・ヌウンより表現が直接的であるといえる)は幾分丁寧さはあるが、尊敬の念はないから目上の人には使えない。私の友人であるジャワ人の人類学者アミン氏はベチャ(人力車)の運転手などに使うといった。いうまでもなく、ベチャの運転という仕事はカサルとされ、彼らに対してマトウル・ヌウンは敬意が強すぎて不適切である。とはいえ、独立したひとつの職業であるからそれなりの丁寧さをもって接する必要があるということだろう。次のタットゥリモ(taktrima)よりは距離のある他人に対しては適切である。なお、ヌド・ヌリモの主語は省略されているが、ここに入る主語は自明であり、あえて使えば自己を強調し過ぎるので避けたと見るべきであろう。それはマトウル・ヌウンの場合も同じである。なお、ヌド・トゥリモとはほぼ同じものとしてアク・ヌド・ヌリモ・バングッ(aku nedha nrima banget)という表現があるという。この文体はやや複雑である。というのは、アクは常形語の自称詞(日本語の「僕」、「俺」に当たる)で、ヌドは敬形語であるが、ヌリモもバングッも常形語だからである。つまりひとつの文体に常形語と敬形語が混じった文体であり、やや丁寧さを出しながらも常形語を多用しているから結局はさほど丁寧というわけではない。しかし、バングッ(「非常に」の意味)をつけ加えているから感謝の念を強調しており、それだけ対者への配慮が強いといえる。この文体は同じジャワ人でも聞いたことがあるという人もいれば、聞いたことがないという人もいるなど、文体の複雑さを反映してあまり一般的ではないのかもしれない。

タットゥリモは敬意を欠く表現である。タッはアクと同じ常形の自称詞で、トゥリモも上述したように常形語である。これは同じような地位にあり、しかも親しい関係にある対者に用いる。地位が下の者に使ってもよい。ただし、後述するように一定の条件がある。なお、タットゥリモと同じ文体としてクトゥリモ(kutrima)という表現もある。クとはアクの省略形で、くだけた感じを強くする。アク・ヌド・ヌリモ・バングッにせよ、

クトゥリモにせよ、タットゥリモにせよ、自称詞を欠かさないが、これは、これらの文体に丁寧さも謙譲の念もないから、自己を押し出したとしても不自然ではないからであろう。

このようにおよそ四通りないし(マトウル・スンバー・ヌウンとマトウル・ヌウンを一括すれば)三通りの段階をもつのがジャワ語の感謝表現である。それに比べると、トゥリマ・カシーだけ、あるいは精々バニャッ(たくさん)などを付けて強調するだけのインドネシア語の感謝表現はジャワ人の感覚からすれば貧弱に聞こえることだろう。

二人の出会いの場としてのインドネシア語世界

貧弱な言語世界も見方を変えれば、旧習にとらわれない自由さをもっているといってもよいかもしれない。多くの若者たちがジャワ語を嫌い、インドネシア語の世界に飛び込んで来るのも当然だろう。ヤティさんにとって異民族が共存する大都会ジャカルタのインドネシア語世界に生きられるだけでも新鮮な自由が保障されたようなものだっただろう。それに加えて仕える相手がジャワ人でも、中国人でも、白人でもなく、日本人であるということも自由を保証するように思えたに違いない。同じ文化を共有するジャワ人の主のもとではジャワ語の世界から脱出することはできない。もちろんおしなべてそうだというわけではないが、中国人は一般に家事使用人の使い方が厳しい。また、植民地時代のなごりで相互に厳しい人種偏見(優越感と劣等感)をもっている白人に対してはジャワ人の側に一種の恐怖感がある。植民地時代のジャワでは子供を脅すときに「オランダ人が来るぞ」といったものだった。今はもう使われないが、ヤティさんはそんな昔の話を聞いていたに違いない。こうしていろいろな国の人ないし民族を並べてみると日本人が最も自由を与えてくれる可能性が大きい。もちろん3年半にわたってインドネシアを支配した日本人の記憶はまだ消えていない。しかし、あの残酷な(kejam)日本軍と同じ民族とは思えないほど今の日本人はやさしいという話も聞いているはずである。後にも述べるが、日本軍の厳しさは今でもインドネシアでは語り草になっている。

山中さんも、日本では到底住むことのできないような広い家と自由に走

り回れる運転手付きの自家用車から開放感を得たことだろう。ただ、家事使用人がいつもそばにいることは彼女の文化にはなくわずらわしかったに違いない。ましてインドネシア語が不自由であるためにわずらわしさは一層強かっただろう。彼女の細やかな気遣いから覚えたてのトゥリマ・カシーを連発したのもその被拘束感から自らを解放するためだったといえよう。

トゥリマ・カシーというのは文字どおりには「好意を受け取る」という意味である。ただし誰からの好意かは明示されていない。よくいわれるように、好意を施してくれた相手ではなく、そういう好意を導いた神なのかもしれない。そういう解釈はしかし日本語の「ありがとう」にしても同じだろう。この日本語の挨拶語も誰に対して感謝しているのかは明示されていない。文字どおりには、「稀にしかないこと」といっているのだから、相手に対してよりもむしろ神に対してなのかもしれない。しかし、私たちがこの言葉を神に向かって言っていると意識しているわけではないように、インドネシア語のトゥリマ・カシーも神に向かって言っているとは限らない。彼らがこの言葉を発しているときの様子では恩恵を与えてくれた相手に対して使っていると考えた方が自然だろう。

若い女性にとってインドネシア語の自由さは心地よいかもしれないが、その自由さがかえって不自由を引き起こすというパラドックスに悩まされることも十分考えられる。とりわけ人間関係の様式にやかましいジャワ文明を背景にしながらインドネシア語を操作しなければならない状況にあってはなおさらであろう。彼女は女主人のトゥリマ・カシーを無意識のうちにもジャワ語に翻訳していたと考えられる。相手が女主人であるからこのインドネシア語をマトウル・ヌウンとかヌウンとは翻訳しないはずである。女主人であることや外国人であることを考えれば、ヌド・ヌリモとも訳さないだろう。残るはタットゥリモあるいはクトゥリモしかないから、彼女はこのジャワ語で置き換えていたに違いない。

ところで、このタットゥリモにせよクトゥリモにせよ、頻繁に年長者から年少者に向かって使用されているわけではない。たとえば子供がなすべき仕事をしたからといって母親がそのつどタットゥリモということはな

い。特別な用事を行ったときに使われるのである。女中に対しても同様である。私が知るジャワ人宅の女中に対する言葉遣いを例に挙げてみよう。その家庭ではすでに十数年にわたって働き続けている老女中とまだ十代の若い女中がいた。この家庭の女中に対する言葉遣いを観察して判ったことだが、基本的に女中たちの義務とされているような仕事になされても、感謝の言葉はかけられない。そうした義務的な仕事以外の特別な用事を命じられ、それが達成されたときによりやく、老女中に対してはヌウンが、若い女中に対してはタットゥリモが使われたのである。なお、この家族の人たちが老女中にヌウンという言葉の掛けるのは不自然に思われるかもしれないが、それは民主主義思想の影響からだと考えられる。敬語がある文明では低い地位の者に対しても端折った形の敬意表現を用いることで対者を相対的に引き上げているのである。若い女中に対するタットゥリモもそうした変化が背景にあると見てよいだろう。私は「下男(あるいは下っ端役人)は蹴っ飛ばして、(中級)役人には微笑で、県長には表情で(教えよ)」(Ndhupak bujang, esem mantri, semu bupati) という格言を聞いたことがある。おそらくジャワ王朝が辛うじて命脈を保っていた 1940 年代半ばまでは、下層の者に対しては手荒な扱いをしたのであろう。そんな状況では感謝の言葉が掛けられたはずはない。先のヨクヤカルタの家庭の場合でも女中たちに優しい言葉を掛けたのは経済的社会的事情もあった。今では女中になる女性は少なくなっている。ジャカルタの外国人がよい給料を出すので、とくに若い女性はジャカルタに流れてしまうからである。そうした状況では多少とも待遇を改めて居心地を良くしなければならない。ジャワの人々にとっては快感主義となづけてもよいと思われるほどに「心地良さ (betah)」が重要な価値である。

ジャワ文明を背景にしているヤティさんが女主人にトゥリマ・カシーを連発されたら、居心地が良くなる以上に自分のしていることが女主人に大変感謝されている、それも不可欠の仕事のように思われているらしいと感じたとしても不思議ではない。おそらくそうした気持ちが高じてだんだんと横柄になったのであろう。

他者に配慮する二つの文明の相克

インドネシアの人々は困難が生じたとき、しばしば「いいんですよ(ティダ・アパ・アパ、tidak apa apa)」といって済ませてしまう。これは自分はもちろとりわけ他人を困惑させたくないという気持ちから生じるひとつの言語表現であることを指摘しておきたい。心中はどうあれ、他者を困惑させたくないという配慮から言語表現を使ってつとめて平静を装うのである。このほかに、驚きや怒りといった他者を困惑させるような感情表現も避ける。同じように、ゆっくりと話す、ゆっくりと行動するといった「緩慢主義」もこの文明が命じるところである。静寂をもってよしとする静寂主義的平和主義といってもよい(染谷: 349)。いずれも他者との平和的関係を維持するためのアールスな言語的非言語的表現である。

アールスを理想とする文明ははっきりとものをいわない態度、人情にもろいなど他人への配慮を大事にする。相手への気遣いからはっきりものをいわないジャワ人の態度は、受け取る相手の受け取り方、読みとり方に大きく依存する他者中心性を必要とする。ジャワには、相手の真意を推察するという意味の言葉(トゥポスリロ (tepa slira) という)があり、しばしば口にされるほどに、相手の心中をうまく読みとることを人々に強いている。もちろん、相手も同じようにはっきり言わないから結局は二者間で互いに相手の心中の読み取り合いをするというきわめて知的な作業をしなければならない。人の心中という見えないもの(アールスには「目に見えない」という意味もあった)を探る技術はジャワ文明が要求するところである。

山中さんに代表される日本人もヤティさんに代表されるインドネシア人(ジャワ人)もともに他者をことのほか気遣う文明の持ち主である。それではこの共通した性格をもつ二つの文明はそのままハイブリッド文明を構築できるだろうか。現実には、気遣いのあまり推察するだけで、自らの意向が言語化されないからそれができないことは明らかである。そしてその推察も自己の文明に基づくものであり、誤解に満ちたものになってしまうから事態は深刻になる。

ハイブリッド文明の構築に向けて

なすべき仕事とそれ以外の仕事を明確にし、それに対して謝意を表現しないとか表現するといった「郷」の習慣を取り入れ、けじめをつけることはさほど難しくはない。また、自称詞や対称詞の使用をできるだけ避けようとする傾向も日本語、インドネシア語、ジャワ語に共通しているから利用し易い。とくに命令するとき、あるいは相手に何かを促すとき、ジャワ語には主語を物にして表現する優雅な表現方法がある。たとえば、先に紹介した家族の娘が語った方法がある。彼女は、女中の義務のひとつである拭き掃除が十分でないとき、「おや、ここはまだ箒が掛けられていないね (Iki kok durung disapu)」と表現するという。主語は「ここ」なのであって誰が掃除すべきかは明示されていない。このような受身表現は実によく使われる。それは命令のときばかりではない。尊敬すべき対者に差し出したお茶を飲むように促すようなとき「どうぞ(これは)お飲みなされます (Mangga dipununjuk)」と日本語には訳しにくい表現を使う。「お飲みなさる、お飲みになる」という意味の *unjuk* という最敬形語を受身にできるからこのような表現が可能なのだが、「お飲みなさる、お飲みになる」の事実上の主語は明示されず(日本語の尊敬語を使用する場合と同じく事実上の主語を明示しなくても明らかだから)、物(この場合は「お茶」)を主語とするのである。もっとも、この表現では「お茶」もまた明示されない。明示されなくともコンテキストで明らかだからである。「察しの文明」の一面がうかがえよう。なお、たとえば、「そこにあるロテツ(野菜や果物を混ぜた食べ物)をとって頂戴 (Tulung tekakake lotek)」というように、家事使用人に特別な用事を頼むようなとき、「助ける」という意味の *tulung* を付けることによって相手の助力がどうしても必要であることを暗に示し、そうすることで謝意を込めるこまやかな表現もあることをつけて加えておこう。

日本人にはなじみやすいから以上のようなことがらに注意して人間関係を円滑にすることは容易だろう。しかし基本的には新たなハイブリッド文明の創出は必要であり、そこにはそれなりの苦労を覚悟しなければならない。そもそも文明は異なった考え方をする人々が平和的に共生できるよう

にするための装置であった。日本文明もジャワ文明も、また、創出途上のインドネシア文明も、長い歴史の中で人々が共生できるように工夫され、洗練されてきた文明であった。しかしそのどれもが共生のためにそれぞれの文明間の関係を調整するハイブリッド文明を構築しなければならないという段階に至っている。

上記の二つないし三つの文明は「察しの文明」と名付けてよいかもしれない。相手の気持ちを大事にする文明といってよいかもしれない。これまでそうした文明でそれなりに平和な社会を築いてきた。だが、二者ないし三者が共生するために、果たしてそうした文明のままで共生は可能だろうか。いうまでもなく不可能である。雇用・被雇用の関係にまつわる明文化した契約を交わすなど明示化は必要となろう。その際に「郷」の方式に従うことは当然考えられることである。ヨクヤカルタでバティック店を営むあるジャワ人女性は次のように語った。「インドネシアではどの店の店員も規律が十分ではないから、いつも注意して見張っていないとすぐに仕事はしなくなるし、怠けるんです。店員だけじゃありません。女中にしても下男にしても同じですよ。」事実、彼女が家事使用人に対して課する規律はかなり厳しく、そのためか、私が知る限りでも家事使用人は何度も入れ替わった。何度も入れ替わることも自体も苦勞の種に違いないが、それでも怠惰な使用人を使って悩まされるよりはましだと考えているのだろう。彼女は被雇用者の規律不足を指摘したが、インドネシア社会全般に対してもこの規律不足を嘆く人が多い。ある人は「インドネシアは規律が欠けるから発展できないのだ」と語った。加えて彼は「それに比べると日本軍の規律は素晴らしかった。ただ、厳しすぎた」とも言った。規律にも自ずから限界があるということなのだろう。

家事使用人を使ったことがない多くの日本人にとってバティック店の営業者がとった方式を採用するには抵抗があるだろう。「郷に従え」とはいつてもにわかには従えないだろう。ある中国系インドネシア人は使用人同士を監視させるシステムを導入していた。その一家はヨクヤカルタでいち早くセルフサービス方式のスーパーストアの営営を開始し、今日では食料品ばかりでなく文房具類なども手広く扱うまでになっている。しかしこの

システムも、ある程度の慣れが必要で、にわかに採用するのも難しいかもしれない。

そこで、使用者である日本人が望ましいと考える方式に沿ったハイブリッド文明の創出が考えられる。たとえば挨拶語で朝晩のけじめをつける日本の習慣を持ち込むこともそのひとつであろう。この習慣は日本だけではなく、他の多くの文明にも見られるから日本人はこの習慣が普遍的だと思っているかもしれないが、ジャワでは目上の者から目下の者に向かった朝晩の挨拶語がない。目下から目上への挨拶語はあるが、これも一般にはあまり使われない(染谷: 241)。インドネシア語にしても同様だろう。「昔は、Sami sugeng, あるいは Sami wilujeng (ごきげんよう、ジャワ語)と言ったものだ。Sugeng enjing (おはようございます、ジャワ語)やSelamat pagi (同、インドネシア語)はオランダ語の Goeden morgen の翻訳だ」とあるジャワの老人が私に語ったように、これらの定型的な挨拶語は植民地時代のハイブリッド文明のひとつなのである。だから外国人向けのインドネシア語の教科書などには朝晩の挨拶語が紹介されているし、もっぱら外国人を相手にしているホテルのボーイがインドネシア語の挨拶語を使うからといっても、家族内や隣近所の人同士でこの挨拶語が使われるとは限らないのである。彼らは、「どちらへお出掛け? (Badhe tindak pundi?)」、「どこ行くの? (Arep ngendi?)」、「パサール(市場)に行くのよ (Dhateng peken)」といった、より実質的 (referential) な言葉を挨拶語として交わすのである。こうした事情が判ればジャワの農村から出てきた少女が朝の挨拶ができなくても、礼儀知らずと非難することはできない。ただ、だんだんとインドネシア語で挨拶をする女中が増えているという指摘がある。日本人のしつけによるものであるならここでもハイブリッド文明が生まれたことになるだろう。

インドネシアでは客にお茶を出す女中は茶を出すだけで、客に向かって話しかけることは禁じられている。しかし日本人の家庭では必ずしもそうした厳格な決まりはないから、客に向かって話しかける女中をしばしば見かける。それが許されていると感じた女中は自己の地位が上がったように思うだろう。あるインドネシア人はそういう女中を見て危険だと言った。

女中が横柄になる危険性を指摘したわけだが、それも管理次第で未然に防げるだろう。要はインドネシアでは女中に何が許され、何が許されていないかを知っておけばよいのである。

家事使用人たちの多くは自らの境遇に甘んじているわけではない。条件さえ整えば転職を希望している。ただその戦略が立てられないのである。貧困が障害となっていることは否めないが、計画を立てて少しでもお金を貯めるなどの方策を教えることも必要だろう。日本には長年勤めた使用人をやがて独立させた暖簾分けの慣習があった。その慣習を無意識のうちにもインドネシアで適用している日本人家族が少なくない。たとえば、下男稼業をやめて妻と一緒にワルン(屋台)を出したいという男に退職時(つまり主人の日本人一家が日本に帰るとき)に資金を提供した日本人がいた。また、運転手になりたいという夢をもっている男に免許がとれるほどの金を援助した日本人もいた。それらのお金は日本人からすればさほどの負担ではない。ただ、日本ではそれが文化として雇用・被雇用の両者に了解されていたわけであるが、インドネシアにはそうした文化はないから、先に述べたような明示化が必要となろう。単に家事だけに拘束するのではなく、習い事を身に付けさせる時間を与えるなど、将来に希望を持たせることで、雇用者・被雇用者ともに心地よい生活を送り、不必要な軋轢を避けることができるならば、ハイブリッド文明構築の良い例となろう。このとき同時に、雇用者は、知識不足のために人生設計を立てられないでいる被雇用者の良き導き手にもなっているのである。

注

- 1) Panganiban によれば、フィリピンには *grasyas* という言葉も使われているという。いうまでもなく、これはスペイン語の *gracias* の借用である。
- 2) ファティック (phatic) とは、直話的、談話的、言話的などと訳され、「叙述的」(referential) と対をなす。挨拶語は本質的に意味内容よりも声をかけること自体に機能を持たされているが、こうした特徴をファティックという(くわしくは染谷: 244、259 を参照されたい)。
- 3) イーミックというのはパイクが音韻論 (phonemics) にちなんだ採用した用語であり、エティックとは音声学 (phonetics) から採用した用語である。詳細に

ハイブリッド文明の構築に向けて

については Pike, K. L. を参照されたい。

- 4) 清水は、文化的背景を異にする人類学者の間の相互批判にそれを求めている。清水: 458。
- 5) 本稿では女中とか下男といった古めかしい日本語を使うが、それは、慢性的失業状態にある現代のインドネシアにあってはまだまだ彼らに対する扱いが厳しいことを反映させるためである。確かに以前よりは改善されているが、それでも「お手伝いさん」といった待遇にはほど遠いのが現状である。
- 6) これはおそらくインドネシア語のトゥリマ・カシーの借用ではないかと思われる。ヌリモというのはインドネシア語のトゥリマに当たる。ただしインドネシア語のトゥリマに比べると甘んじて受ける、この場合には相手の好意を不可欠なものとして受け入れるといった語感があるが。

参 考 文 献

伊東俊太郎「比較文明学とは何か」(伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』、京都: 世界思想社、1997 年)

Panganiban, J. V. (1973). *DIKSYUNARYO TESAURO PILIPINO-INGLES*, Lungsod Queson: Manlapaz Publishing Co.

Pike, K. L. (1967). *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. The Hague: Mouton.

リーチ『社会人類学案内』長島信弘訳(東京: 岩波書店、1991 年)

清水昭俊「永遠の未開文化と周辺民族」『国立民族学博物館研究報告』17 巻 3 号、大阪: 国立民族学博物館(1992)

染谷臣道『アールスとカサル——現代ジャワ文明の構造と動態——』(東京: 第一書房、1993 年)